勇気のカケラ

成流丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇気のカケラ

【Ｎコード】
Ｎ４０８１Ｆ

【作者名】
成流丸

【あらすじ】
平凡に過ごしていた翔の妹が突然行方不明になった。翔は必死に探すのだが全く見つからない。諦めかけた翔だったが信じられない光景を目にする。“それ”が妹の行方不明と関係あると思った翔はー。

プロローグ（前書き）

えーっと…かなりの駄文ですｗｗ

小説なんか初めてですし。

暇つぶしで書こうかなと軽い気持ちで書こうと思っただけなんｄ（

ゲフンゲフンっ

それでもいいなら是非読んで下さいｍ（＿＿）ｍ

プロローグ

ここ…どこだっけ？

暖かい……。

でも…起きないとまたお母さんに起こられるし…。

「はぁ…」

重い瞼を上げた。

「は？」

少年の目の前には剣が地面に突き刺さっていた。

いつもの日常（前書き）

さて本編です（・ω・´）

前にプロローグって書いたけどプロローグってなｎ（アフォ

さて　駄作ですが少しでも楽しめるように頑張りますΣ（ｂ＾－　）

↑

いつもの日常

「翔っ！翔！起きろ！翔っ！」

五月蝿い……

スコーンっ

頭に痛みが走る

「いってぇっ」

慌てて顔を上げる。

「翔くーん？よく眠れましたか～？」

声は優しいが顔が全然笑っていない。

「顔がよだれでベトベトですよ～？」

「……」

後ろの席の人物を睨む。

「俺は何度も起こしたぞ！」

「翔くん……？」

「はい…」

「廊下に立ってなさーっっい！」

指を廊下に向け叫ぶ。

「はーっいっ！（汗」

僕は『杉上翔（すぎがみかける）』ここ『白上小学校』の６年生だ。

さっきの後ろにいた奴は『渋川大吾（しぶがわだいご）』一応親友……かな？

勿論叫んだのは先生だ（汗

キーンコーンカーンコーン

学校の終わりのチャイム。

ランドセルを背負い校門から出る。

今日も一日寝て学校を過ごしたような気がするのは気のせいだろうか。

そんな事を考えながら大吾の横を歩く。

「にしてもよー」

先に口を開いたのは大吾だ。

「何？」

「お前、今日も寝て一日過ごしたな。ハハハっ」

どうやら寝て過ごしたのは気のせいじゃないみたいだ。

「眠いんだから仕方ないだろ（笑」

「でもよ、もう少しバレないような寝方があるだろうよ」

「……例えば？」

「教科書を机に立てて寝るとかよ！」

指を立ててニコっと笑いながら自信満々で喋っている。

どうやら大真面目のようだ。

「お前……」

「ん？いい考えだろ！」

まだいうか

「お前、いつ生まれだよ。考え方古っ（笑）」

「んなっ！？いい考えだろーっ！？」

大吾が飛びかかってくる。

いつもの事だ。

毎日じゃれあって、話して。

ワンパターンだけど楽しかった。充実してた。

ずっと続けばいいと思った。

ずっとーーーー。

崩れ行く日常（1）ー消えた妹ー（前書き）

一応第2話です。

もう自分でも何が何だか…↑

見ていただければ幸いです。

崩れ行く日常（1）ー消えた妹ー

家に付くとお母さんの様子がおかしい事に気づいた。

「お母さん？なんかあった？」

「あっ翔！雫見なかったっ？」

雫というのは４年生の僕の妹。

今日は五時間で終わりだからとっくに帰って来ているハズなのだ。

僕も少し心配だったが……

「どうせ友達と遊んでるんだよ。お母さん落ち着いて？ね？」

僕が言うと少しは落ち着いたようだ。

「そ…そうよね。もう４年生だもんね。友達と遊んでるのよね」

そういうとご飯を作り始めた。

７：３０

まだ雫は帰って来ない。

お母さんはオロオロしている。

警察に電話までしようとした。

今日はお父さんの帰りが早かったから
「まて文江、もう少し探してから警察に電話するんだ」
文江と言うのはお母さんの名前だ。
「雫…」
僕はポツリと呟くと家を飛び出した。
お母さんとお父さんの呼び止める声が聞こえたけど無視した。
今は雫が心配でしょうがなかったのだ。
「雫ーっっ！」
叫びながら探し回った。
周りの人が変な目で僕を見ていたけどそんな事構ってられるか。
今は雫が優先だ。
「雫ーっ！！雫ーっっ！」

どれぐらい探しただろう。公園に行き、時計を見る。
１１：４８
もう2時間叫び続けていた。
どうりで声もガラガラになるわけだ。
「雫…」

一度、家に戻る事にした。

当然、二人に怒られたが、そんな事はどうでもよかった。
何よりも雫が心配だったから。

ずっと僕に付いてきた雫。
ずっと僕と遊んでた雫。
別にシスコンじゃあないが凄く心配だった。

《今何してるんだ雫ーー。》

次の日
警察がうちに来た。
お母さんが電話したらしい。

「君が翔君だね？安心してね。君の妹は我々が必ず見つけるからね」

《警察なんか当てになるもんか！》

僕はその言葉をなんとか飲み込んだ。
そして僕はまた雫を探しに家を飛び出した。

探してる途中、ある事に気が付いた。

「今日も学校だった……。」

無断欠席はマズい。
今まで何回かあるが、次無断欠席したら親を呼ぶと先生に釘を刺されていた。
《どうする…家に帰るとお母さん達に捕まるだろう…学校には…流石に手ぶらじゃ行けない…とすると…》

《ココしかないよな…》
目の前の家の標札には『渋川』
大吾の家だ。
時間は７：２５まだ家に居るだろう。
インターフォンを鳴らす。
ピーンポーン
「はい？」
インターフォンのスピーカーから大吾の声が聞こえる。
「あ？大吾？僕だけど」
「あ、翔か。」

家のドアが開く。
「翔、どうした？」
「あー…先生に今日は休みますって伝えといてくれないか？」
大吾は変な顔をした。
「家から自分で学校に電話すればよかっただろ？」
「ちょっと今家に帰れない事情が出来てね…」
「なんかあったのか？」
大吾に余計な心配をさせたくなかった。
だから
「何でもないよ」
「そうか？ならいいんだけど…」
「ああ、じゃ僕行くね。」
「…ああ。じゃあな」
「うん、バイバ……」
つぅ……
「おっおい！？お前、何泣いてんだよ！？」

僕の目から涙が流れた。

「えっ！？あれ？おかしいなっ（汗」

まるで、体が何かを察知したように涙が止まらなかった。

「お前、本当に大丈夫か？」

「大丈夫…だよ」

「……」

「大丈夫だからっ。じゃ僕行くね。バイバイ」

「ああ…じゃあな」

大吾はまだ心配そうに僕を見ていた。
こういう時に本当に大吾はいい奴だと思う。
にしても…
なんで涙が…
泣くつもりなんかなかったのに
どうしたんだろう…。

その後もしばらく雫を探したが何も手掛かりが見つからなかった。

「今日も…駄目なのか…？」

諦めかけて空を見た瞬間。

カッ

空で何かが光った。
そしてその光は近くの公園に落ちていく。
いや　違う。
空から光が公園に伸びている。繋がっている。

「なんだよ…あれ……」

僕はしばらく眺める事しかできなかった。

崩れ行く日常（2）ー謎の光ー　（前書き）

えっと第3話です。

ここで翔の日常は急展開します。

話に色々無理がありますがそれは作者がまだまだ未熟な為なので笑って気にしないで下さい（、∀、；）

では駄文ですが、第3話、お楽しみ下さいm（＿　＿）m

崩れ行く日常（2）ー謎の光ー

僕は光が伸びている公園に行くことにした。

タッタッタッ！

僕は今走っている間に気付いた事がある。

《誰も光なんて気にしていないようだ》

普通、空からあんな光が伸びていたら大騒ぎになるだろう。

《変だな…》

僕は歩いてる人を1人捕まえた。

「あの…あの光なんなんでしょうか」

「……光ってどれ？」

「！！」

すぐ理解した。

あの光は僕にしか見えないんだ…。

あれこれ考えてるうちに公園についた。

「！」

光は公園の滑り台に伸びていた。
滑り台を囲むように。

《……この光…近くで見ると懐かしいような気がする…》

勿論そんな筈がない。
でも何故かそんな気がした。

「さて…どうするか…」

とりあえず光の中に入ろうと思った。
でも……

「……」

足が動かない。
こんなに神々しい光で怖い事なんかない筈なのに

《昔から僕は……何もできない……肝心なとこで何も出来ないし言えない》

そんな事を考えて光の前で立ち尽くした。

どれぐらい経っただろう。
もう周りは真っ暗だ。

不思議とこの光は周りは照らさない。
光の中だけが光っている。
突然光の中から蝶が現れた。
「もう意気地なしねー」
「!?だっ誰!?」
「私よ私。ヒラヒラ飛んでるでしょ?」
「まさか…蝶?」
「そうよ」
信じられないが周りには誰もいないし、どうやら本当のようだ。
「君、本当に6年生?」
「っ!五月蝿いなっ!」
「怖いの?こんな綺麗なのに?」
《五月蝿いっ五月蝿い五月蝿いっなんで蝶なんかに言われなきゃいけないんだ!》
《でも…また今思ってる事が言えていない…》
「ああ…怖いよ…」
「君の妹は…」

「！！？？妹を知っているのっ！？」

「この光の中に入るわ」

「……？」

光の中に妹は見えない。

「入って滑り台を滑れば分かるわ」

僕は足を動かそうとする

でも…足は動かない。

どんなに動かそうとしても足が動いてくれない。

《なんで…なんでだよっ！》

「ねぇ、妹の消息が掛かってるのよ？」

《五月蝿いっ僕だって分かってる！でも…》

「……とんだ腰抜けね。信じらんない」

「……」

僕は何も言えない。

彼女（？）の言ってる事はキツいけど正しいから。

僕のたった一人の妹の事なのに自分は動けないから。
悔しい……

《なんで…なんで僕にはこんなに勇気がないの……？》

「それは君の勇気がバラバラになっているからだよ」

「！？」

また知らない声

「長老様っ！？」

《蝶の長老様？ｗｗ》

「コレ、変な事を考えるでない」

「え？コラっ翔！長老様の変な事考えるなっ」

《心の中が読めるのか…？》

「読めるとも」

《迂闊に変な事考えられないな（汗》

「フォッフォッフォッ」

「で…僕の勇気がバラバラだって？」

「そうじゃ」

「言ってる意味がわからないな…」

「うむ、勇気とは誰しも持ってる物じゃ。　勇気は目には見えないが一つの塊となって人の心の中にあるハズなのじゃが…」

「僕の勇気は塊がバラバラになってるって事？」

「そうじゃ」

にわかに信じられないけど、今までの僕の行動力の無さなどを考えると信じざる終えない…と思った。

「じゃあ、そのバラバラなのを塊に戻してよ」

「コラ！長老様になんて口の聞き方をっ」

「いいんじゃよ、フェイト」

今初めてあの蝶が

「フェイト」と言う名前だとわかった（笑）

「で…バラバラなのを塊に戻すと言う話じゃが…」

「うn…はい」

一応敬語にする事にした。

「無理じゃ」

「なんでっ！？長老様ならできるでしょっ！？」

「ふむ…ワシも普通ならできるよ　しかし君の勇気はバラバラのカケラが…」

「カケラが…？」

「体から抜けているようじゃ」

……。

「っえぇぇぇぇぇ！！」

《じゃあ僕の体に勇気が今ないって事か！？》

「いや少しだけある。本当に少しだけじゃがな」

「……！抜け出した僕の勇気は何処にあるんですかっ！？」

「フォッフォッフォッ。君は頭がいいな。普通はここでショックでもう何も考えられなくなるんじゃが…」

何故か満足そうな顔で笑う長老。

「……あるのはあるんですね？」

「勿論あるとも」

「何処ですかっ？まさか全世界に散らばったとか言わないですよねっ？」

「いや“一つの世界”じゃよ」

「よかったぁ…やっぱり日本ですよね」

「いや、違う」

「え〝……？」

「その光の中の世界、『幻想界（ファントムワールド）』の中じゃ」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「馬鹿者！叫べば文字数稼げると思うな！」

「ちょっwwそういう事は作者に言ってくださいよww」

「む…そうじゃな」

「で…『幻想界』でしたっけ…？」

「うむ」

「なんでその『幻想界』という世界に僕の勇気のカケラが？」

「ワシもわからぬ。君自身が行って確かめればいいじゃろう？」

「でも長老様。僕は…勇気が出なくてその光の中に入れないんです」

「フォッフォッフォッ」

「何笑ってるんですか？」

「コレを見るんじゃ」

突然空からオレンジ色に光るパズルのピースの用な物が降ってきた。

後まだ触れていなかったケド、長老様は僕とフェイトの目の前にはいない。声だけ聞こえてるんだよｗｗ

「うわあ…綺麗…」

僕がピースに触れた瞬間。

体がオレンジ色の光に包まれた。

「うわっ！？」

そしてピースがーー。

体の中に入った。

「まさか今のが勇気のカケラ？」

「そうじゃ」

「なんで長老様が持ってるの？」

「そういえばまだ話てなかったの。フォッフォッフォッ」

話を聞くと、ある日『幻想界』でここ…えーっと……僕達の世界の子の勇気のカケラが見つかった。

『幻想界』の人達はとても悩んだ。

「何故幻想界の者以外の勇気のカケラが！？」

「いったいどうやったら！？」

「フォッフォッフォッ。まあまて君達」

「長老様…」

「そんなに悩むなら返してやればよかろう？」

「ですが、長老様！」

「よいから早く勇気のカケラを探すのじゃ」

「はっ！」

で…勇気のカケラ探しをしたらしいんだけど…

結局一つしか見つからなかった。

で悩んでる時に一人の少女が『幻想界』に侵入したという報告が入った。

「フォッフォッフォッ。いったい誰じゃ？」

「それが…先日の勇気のカケラの持ち主の妹…みたいです」

「フォッフォッフォッフォッフォッフォッフォッ！これは面白い。その子を利用しよう」

「…で長老様は妹を助けるついでに自分の勇気のカケラは自分で探せと…」

「フォッフォッフォッ　そうじゃ」

「それって『幻想界』側の人が探せなかったからでしょｗｗ」

「……ち…違う。君の成長の為じゃよ」

「今笑わなかった！笑わなかったよね！？図星なんですよね！？ｗｗ」

「いっいいからさっさと探しに行くのじゃ！！」

「うはｗｗごまかしたｗｗ」

《……まだ怖い。でも…さっきより怖くない》

すっ・・・

僕は足を光の中に入れた。
「もう…平気だ」
僕は滑り台の上に登った。
《これを滑ると『幻想界』か…ハハっまだ信じられないや》
「フォッフォッフォッ嘘じゃないぞ」
「わかってますよ」
「さて…今のうちに言っておくが、君が『幻想界』に行ったらワシの声はもう君に届かない」
「えっ」
「『幻想界』には危険なモンスターもいる」
「え……」
「フォッフォッフォッわかったな？」
「なんで行く直前で言うんですかァァっ！」
「フォッフォッフォッ」
「長老様の馬k」

叫ぼうとした時だった。

ズルッ

「あ」

「あ」

「あ」

僕、フェイト、長老様　三人（？）とも間抜けな声を出した。

僕は…足を滑らせ滑り台を滑って行く。

「イヤァァァアアアアア！！！」

僕は涙を流している。

こうして僕は妹を探す為、自分自身の勇気のカケラを探す為、『幻想界』への一歩を踏み出したんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4081f/

勇気のカケラ

2010年12月30日17時36分発行